

地域医療連携センター

# 地域医療連携センター

## 地域医療連携センターの使命と将来への期待

事務部副部長代行 黒澤 正剛

### I. この 20 年を振り返って

済生会栗橋病院は開設 20 周年をこの 7 月に迎えることとなった。20 年前この病院で勤務を始めたのが昨日のように感じられる。当時、病院の周りには民家も少なく田んぼや畑が広がっていた。こんな立地ではたして患者さんが来てくれるのだろうかと心配した事を懐かしく思う。

この 20 年間で医療界を取り巻く環境は大きく様変わりをした。診療報酬と言えば右肩上がりに増加して行くのが当たり前の時代から、現在では毎年削減される事が当たり前の時代へと 180 度方向転換され、一方的な社会保障費削減の時代へと投入した。さらに、看護師不足や医師不足が拍車をかけ、今までの病院経営の常識がまったく通用しない新時代を総ての職員が経験することとなった。この激動の時代の真ただ中に栗橋病院が 20 周年と言う大きな節目を迎えられたことは、栗橋病院（職員一同）にとって大きな誇りであり、努力の賜物である。

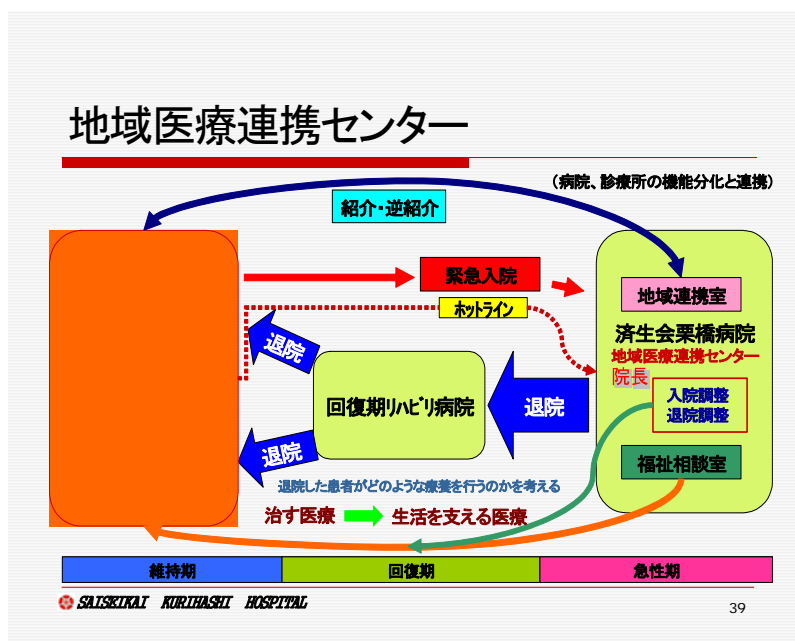
我々は、この 20 年と言う節目を大切にし、30 年、40 年と栗橋病院が地域医療にとってかけがえのない医療機関となるよう現在の職員はもとより、後輩へと地域医療の大切さを伝承していかなければならない。

### II. 地域医療連携センターの歴史

地域医療連携センターは、現在、病院長をセンター長に向かえ総勢 8 名のスタッフが日々地域連携に悪戦苦闘する栗橋病院の新しい顔となっている。

地域医療連携センターは大きく病診連携室と福祉相談室の 2 部門から成り立っている。

現在の地域連携室の前進は、平成 11 年 12 月東館 2 階事務所内に看護部所属として立ち上げた病診連携室及びベッドコントロールです。平成 12 年 9 月には病院長直属として所属変更が行われ、その後、平成 15 年には患者さんにより近い場所を求め、1 階医事課内に活動



場所を移動。平成 16 年 7 月に医療福祉サービス部-病診連携室、平成 18 年 4 月医療福祉サービス課-病診連携室、平成 19 年 3 月には医事課-地域連携室となった。

一方、福祉相談室の前進は、開院と同時に発足した医療社会事業課が、平成 13 年の医療福祉課を経て平成 16 年 7 月に医療福祉サービス部-医療福祉課、平成 18 年 4 月医療福祉サービス課-福祉相談室、平成 19 年 3 月には医事課-福祉相談室となった。更に、両室共、平成 20 年 7 月にはこれからの地域医療連携のニーズをいち早く反映すべく「地域医療連携センター」として、再度の組織編制を経て現在に至っている（図 1）。

地域医療連携センターのコンセプトは、質の高い医療を効率的に提供するために医療機能の分化・連携を推進することであり、従来の「医療機関完結型」医療から「地域完結型」医療を推進することであり（図 1）、更に、「治す」医療から「生活を支える医療」へのバックグラウンドを作る事である。

### III. 地域医療連携センターの業務

各セクションではそれぞれ以下のような業務を行っていますが、日々臨機応変な対応が迫られるため、業務に対する習熟度が大きく求められている。

- (1) 入退院支援室
  - ・ 入退院のベッドコントロール
  - ・ 入院に関する相談
- (2) 福祉相談室
  - ・ 経済的な問題に関すること
  - ・ 退院後の生活について
  - ・ 転院（医療機関・福祉施設等の連携）に関すること
  - ・ 公費医療制度に関すること
  - ・ 社会保障制度（年金・医療・福祉）について
  - ・ 在宅介護・施設介護について
  - ・ 減免制度について
- (3) 地域医療連携室
  - ・ 紹介患者に関する地域医療との連絡調整
  - ・ 予約紹介患者の受け付け対応
  - ・ 紹介患者の情報管理
  - ・ 登録医に関すること
  - ・ 研修会・講習会の開催

### IV. 近年の成果

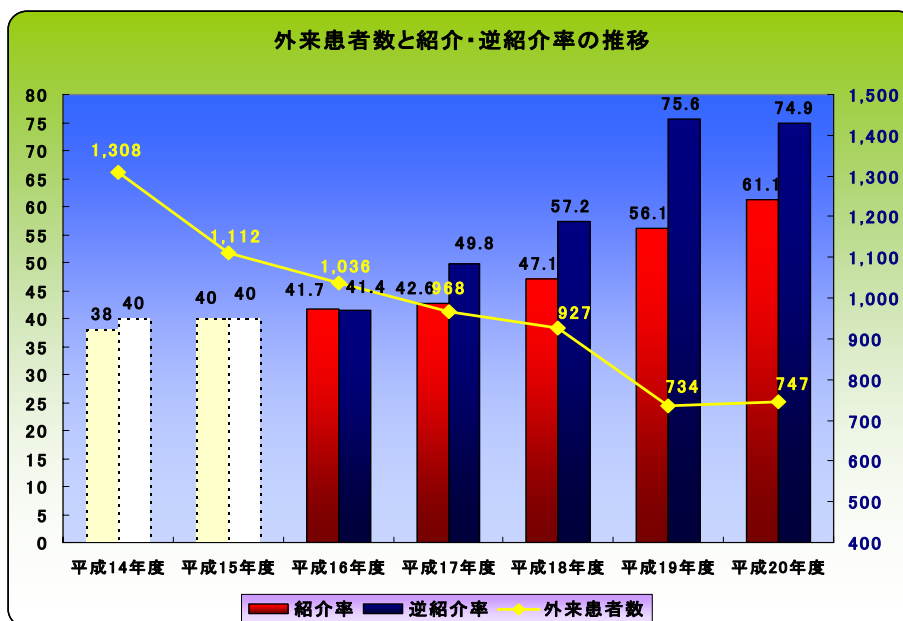
地域連携室では平成 19 年の地域医療支援病院取得時の紹介率及び逆紹介率のアップに大きな貢献を果たした（図 1）。

また、福祉相談室では、平成 20 年度の診療報酬改定より点数化された地域における脳卒中連携パ

スへ医事課と共に積極的な取組を行い一定の成果をあげることが出来た。

## V. 最後に

今後、地域医療連携に対するニーズは更なる広がりを見せて行くことが予想されます。医師不足や看護師不足と言った課題は一気に解決するものではありませんが、地域の医療資源を各施設が有効に利用し、医療機関同士の不足しているところを上手に補い地域に根ざした連携を目指して行きたい。



(図1) 外来患者数と紹介・逆紹介率の推移